

最近本書を再讀せるに、最初讀みたる折に劣らざる感銘を得たり。

こは、幕末期より明治初年に至る時期に、日本各地に滞在し、或いは旅行せる歐米人の見たる日本の姿を、克明に再現せんと試みたる書なり。類書尠からずと雖も、涉獵せる資料の多き、著者の讀みの深き、他の追隨を許さず。類書を、遙かに擢んず。

著者、歐米人記録者が記録を、言言句句引用するのみならず、時に、その當否を具さに論議す。更に同時期の日本人の回想録等を参照して、傍證を固む。著者が、當時の客觀的事實を探求するや、周到にして、記録者の誤解、思ひ込みを匡すや、峻嚴なり。

斯くて本書は、歐米人觀察者の記したる幕末期、明治初期日本の像、當時の日本人の生くる姿を、相當程度正確に記述す。少くとも著者はそを、渠等歐米人觀察者の、目に映じ、心に感じたる儘に、再構成せんと努め、之に成功せり。

日本敗戦後、我ら日本の知識人、祖國の過去を、自虐的、批判的にのみ見る習性を身にけたり。敗戦後の知識人の説くところに據らば、江戸時代の、「封建制度」下の民、幕府、封建領主の搾取と抑壓の下に、呻吟せり。不徹底なる革命たりし明治維新は、その後も、「封建制度」と搾取を殘存せしめ、貧困の中に苦惱せる民衆を、昭和の軍國主義は、海外への侵略行動に、驅り立てたりとなむ。

斯かる極端なる自虐的日本像、今となれば、奇異の觀を免れざらむ。されど我、一九九〇年代に、大學に講義せるに、學生ら、日本の歴史と社會につき、實際を掛け離れたる認識を有するを知り、呆れたり。或は、江戸時代の士農工商、差別的階級制度なりとし、武士は、絶對的權力もて、農民らを抑壓せりと信ず。或は、敗戦後の農地改革以前の日本の農民、地主が苛烈なる「封建的」搾取を受くるとす。また男女差別厳しく、女性の、奴隸の如く、男にかしづけりと思ふもあり。學生らのそを信じ込む、頑迷固陋にして、その誤りなるを教ふるに、多大の時間を要せり。

訪日せるフランス共産黨書記長、一日、日本共産黨に近き婦人團體にて、講演せり。講演は、現代の日本女性、家庭に職場に、常時差別を受け、奴隸的に、男に奉仕するを力説す。聽衆の日本人女性、その、餘りに實情と掛離れたるに啞然とし、講演原稿の執筆者を調べたるに、そは、大學佛文學科卒業後、直ちに日本共産黨書記局に務めたる若き女性黨員なりしとぞ。日本の大學に學びたる者ら、日本の現實を學ばざるのみか、現實を懸け離れたる、悲惨なる日本像を植附けらるること、斯くの如し。

そは一九八〇年代のことにして、本書の、初めて刊行せられたるは、そのころなり。本書の刊行の、世に衝撃を與へたらむは、能く想像せらる。啓蒙的意義、大なりしならむ。本書、及び本書の引用せる歐米人の著書等に據らば、幕末より明治初年までに、日本に來たり、滞在せる多くの歐米人ら、當時の我が國人が生活に接し、批判的言辭を述ぶる者、無きに非ざるも、壓倒的多數の感嘆し、稱揚せる、豈、かの小泉八雲なるラフカディオ・ハーン、ポルトガル人海軍將校にして、徳島に生を終へたる日本心醉者、ウエンセスラウ・モラエスのみならんや。

斯かる稱揚は、エクゾテイズム、若しくは日本側の粉飾に基づく幻想なりとて否定するが、敗戦後の日本知識人の通例なり。されど著者は、同時代の日本側の資料等を引き、歐米人らが讚嘆の、幻像に非ずして、多く事實に基づくを實證す。

歐米人らの見る當時の日本人、よき食生活のゆゑか、身體強健にして、心性は無邪氣・善良、禮節正しく、特に女性と子供は、陽氣にして、幸福感溢る。常にころろと笑ひ轉げ、活發に動き廻れり。好奇心強きは、歐米人に迷惑なれど、惡意無く、折に觸れて示す親切は、感動的なり。

經濟的に豊かなる國にあらざれど、精神的には豊かに、社會に和氣藹々たり。人々の間に、強き倫理觀滲透すれば、争ひ、暴言、犯罪等、自づから尠し。人々は勤勉にして、勞働を厭はず、鄭重なる挨拶を缺かさずして、互ひに、細やかに氣を遣ひ、微笑を絶やさざるのみか、動物、魚類、蟲類に至るまでの生きものを慈しむ。反面、獸類、例へば犬、馬等の獰猛なる、又蟲類の各處に跋扈せる、歐米人らを惱ましむ。蟲類、菌類を嫌ふ現代日本人、タイムマシーンに乗りて、この時代に歸らば、如何に感ずるや。

我らが國の、四季折々の風景は、今も異國の旅人の、嘆賞する所なり。況んや當時、今日之の如く、奇拔なる建築物、原色のけばけばしき色彩の、階調を亂す無きに於てをや。書中隨處に、當時の歐米人のデッサン、スケッチ、銅版畫等の挿繪を附す。日本人生得の美的感覺に困りて、歴史を通じ、營々と磨き上げたる風景の美しさは、瞠目するに足れり。

民族が美的感覺、諸處に顯はる。未だ歐米の派手なる意匠、色彩に、混亂せられざれば、人々の身に纏ふ衣服、身にくる細工品、色彩は地味なるも、趣味好し。異國人ら、争ひて之を求むるは、今も歐米各地に、日本の根附、印籠等の個人蒐集品多きに知らる。

當時の江戸・東京は、世界に冠たる百萬都市なるも、歐米の大都市には似ず。廣き地域に、市街地も農村も寺社も、共存す。誠の「田園都市」と云ひつべし。

異國人らの格別の興味を惹きたるは、様々なる職業の人々の、様々なる姿恰好にて、市街地を歩み行くさまなり。それぞれに自由に、自らの職業に勤しみ、自信と誇りを持つと見えたり。社會の許容する多様性は、歐米より、又今の日本より、遙かに勝れり。

歐米人を一驚せしめたるは、市街地は固より、國中各地に見らるる浴場の、男女何れも、裸體を恥ぢざる混浴なり。珍しき歐米人の、街路を通らば、浴場の中より、好奇心に驅られたる男女、一絲も身を覆ふことなく、争つて出で來たる。

裸體の禁忌無く、又性の禁忌も緩やかなれば、嚴格なるキリスト教精神より、日本を罪深き國とて、嫌惡感を示す歐米人、少なからず。されどそを、アダムとイヴの、原罪による樂園追放前の、罪なき姿に比すべしとて、是認し、讚嘆するも亦多し。

本書は、幕末・明治初期の日本の姿を、ありの儘に喚起する書なり。著者、一部歐米人の讚嘆を、幻想なりとて否定せざるも、本書により、日本の文化を、世界の人の、感嘆措く能はざる文化なりとの、自己陶醉も亦戒む。著者、能く中庸を守れり。

但し著者、明治初年までの日本を、曾て世界各地にありて、「近代」の到來と共に、滅亡せる「文明」の一なりとす。我、これには異議あり。著者の引用せる諸記録の語る日本に、今は消滅したるもの多し。歌舞伎の例を擧ぐれば、「三人吉三」の冒頭、夜鷹女登場

し、客の忘れたる百兩を届けむとす。これは今の世に、求むべくも非ず。されど同じき心、今の日本人より、全く消滅せるや。現代の日本人の、無邪氣に生活を樂しみ、人との繋がり喜び、子供、動物を愛する心情、幾ばくか、幕末の日本人と、共通するに非ずや。

著者の見るに、敗戦後日本知識人の、宗教否定傾向、江戸時代末期の武士の、儒教的素養に基づき、佛教・佛僧を蔑視するに共通すとぞ。そが如く、今の日本の、様變りすと見ゆる底に、江戸時代末期より、脈々と繼續するものあり。そは、日本人の心情の根底を、伏流水の如く流れ、時あらば、再び表面に流れ出づるに非ずや。

著者は、明治初年までの日本を、様變りせしめたるは、「工業化Ⅱ近代化」なりとす。日本を變へたるは、さに非ずして、「歐米化」ならずや。我らが日本には、「工業化」、即ち「歐米化」なりき。日本は十九世紀後半、歐米の重壓に抗し、「歐米化」により「工業化」を達成せむが爲、古來の傳統文化を抛擲す。斯くして我ら、古來の文化傳統より切斷せられ、心の安定を失ひ、危ふき歩みを歩めり。そは、我らが悲劇なりしに非ずや。

歐米の世界支配に抗せんと、大東亞戰爭を開始せるも、完膚無きまでの、物的、精神的破壊を蒙る。但し我らが犠牲は、歐米の富の獨占を破り、よりよき世界を實現す。そは、歐米外の諸民族に、「歐米化」に非ざる「工業化」を、推進可能ならしめたる所以なり。

本書の日本を訪れたる歐米人に、最も類似せる我が體驗は、一九八〇年代に、アラビヤ半島オマーン國に滞在し、隔絶せる山地の村々を訪れたる、是なりき。この國、一九七〇年まで鎖國したれば、歐米文化の害惡に、毒せられざる文化的獨自性を保持す。

訪問せる何れの村の人々も、親切にして、村の長ら、我を、村の中心なるイスラム教寺院に請じ入れ、コーヒー、棗等を供す。一度として、身の危険を感ずること無く、村より村を歴訪し、常に歓迎せらる。村ごとの風習、文化、異なれども、何れの村も、植生豊かならざるに風景美しく、人々は善意に溢れ、來訪者を歓迎するは、會ての日本人に似たり。現下のオマーン國が「近代化」、明治の日本と相違して、古來の文化を破壊することなく、進行すと覺ゆ。我自問す、此の國、日本の悲劇を、免れ得たるに非ずやと。

現下の日本、亦、明治以來兩度に亙り、受けたる衝撃より、脱出する端緒を、漸く掴まんとするにあらざるや。兩度の衝撃とは、一は明治期に、西歐型「近代國家」確立の無理を強ひられたる、二は敗戦後の占領期に、傳統文化否定に誘導せられたる、是なり。いつか我ら、二つの衝撃より脱し得ば、『逝きし世の面影』にあるが如き境に、再度近づくを得べからむ。

(平成二十八年九月二十七日受附)